
魔法戦記リリカルなのはVF-Conect

銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはV F - Connect

【Nコード】

N5690X

【作者名】

銀狼

【あらすじ】

ミツルギ魔法具テスト社、それはミッドチルダの裏路地の一角にある様々な魔法具をテストする小企業である。しかし、秘密を絶対を守るという秘匿性に小企

業ならではの依頼料の安さ、そして大企業テスターにも引けを取らない制御能力からその業界では非常に有名な会社であった。そんな彼は父親であり先代社

長の知り合いで、一戦を退いた後も管理局を裏から操る『管理局の魔女』である彼女からある依頼を受ける。”最近出沒し始めた霸王と名乗る通り魔について

調べてもらえないか”と、これから始まるのは一人の青年がVとFを繋ぐ物語。魔法戦記リリカルなのはVF - Connect、始動。

00話 プロローグ

「ターゲット確認」

深夜、草むらの中で銀色の髪と瞳をした10歳前後の少年は年とは似合わない平坦な声で呟いた。その手にあるのは身の丈以上もある大砲、ヴァンデイン・コーポレーション製の試作品であるそれは魔力砲撃の際に生じる魔力を最大8割も隠蔽する能力を持ったストレンジデバイス。そしてその砲口は暗闇の中、人目を避けるようにして進む集団へと向けられていた。

「ファイアリングロック解除、発射」

少年がトリガーを引くとその砲口からは銀色の光束が撃ちだされ、集団を飲み込む。そして光が収まると少年は手にした大砲を手放して集団へと走りだす。いや集団だった、といったほうが正しいだろう。先の砲撃で半数以上が塵も残さず灰とかしていたのだから。

「斬」

突然の攻撃、しかも非殺傷設定ではなく殺傷設定による魔力砲撃。仲間の突然の死に思考が追いついていないであろう男へ、少年は懐から取り出したナイフ型ストレージデバイスの刃をその首へと斬りつけて落とす。

「なっ……」

その一撃で少年に気がついた魔導師たち、とはいっても先の砲撃で6人に減っていた彼らは今もなお思考が追いついていない。命令

する者がいれば即座に動けただろうが残念なことに少年の最初の砲撃で既に大気中に霧散している。そうして残り6人の命が削り取られるまで1分もかからなかった。

「任務完了、帰投する」

黒い服や銀髪に所々赤い液体が付着し、ナイフは持った手ごと濡れているのになにも思うことがないように少年は呟く。ふと少年は空を見上げる。そこには少年の髪と同じ色をした銀色の月が光り輝いていた。

「……同じ、でも違う」

誰にも聞き取れないほど小さく、少年が呟いた時その銀色の瞳にどこか悲しげな色が混ざっていた。

「霸王イングヴァルドという人物について調べて欲しい、ですか」

黒髪黒瞳の青年、キョウマミツルギは不思議そうに呟いた。彼はミッドチルダにおけるなんでも屋であり、確かに探偵のような真似事もしたことがあった。だが”歴史上の人物”について調べるな

どといった依頼は初めてであった。そう霸王とは数百年も前にこの世界にいたという人物なのである。

「ええ、最近そんな名前の通り魔が出るそうじゃない。それでうちの娘が凄く心配していてね」

映像の向こう側で緑色の髪をした妙齡の女性リンディィハラオウンはそう言つと手元にあった湯のみをずいといと啜る。その様子を見て顔をしかめながら、最近になって路上で試合を持ち込んで相手をボコボコにする奴がいたことを思い出すキョウマ。

「試合を申し込んでから相手をする変わった人物らしく、そういえば知り合いでも申し込まれた奴がいましたが拒否した所相手は去つたとのこと。それにリンディィさんの娘さんだったら仮に勝負をしたとしても返り討ちにするのが落ちでしょう」

「随分律儀な人なのね、うん余計に興味が引かれたわ」

「……………実は他の仕事で忙しいのですが」

「若いうちには苦労したほうがいいわよ」

「随分と婆臭い言葉を……………」

「なにか言つたかしら？」

「いえ、なんでもありません。謹んで捜査をさせて頂きます」

「ええ、お願いね、それじゃ」

それだけ言うと映像は消える。それを見届けてからキヨウマは部屋を後にする。先ほどキヨウマが言ったことに嘘はなく、割と大きな仕事が入ったために忙しい時期であった。故にキヨウマは依頼をとっとと解決するために早速街へと繰り出したのだった。

『弱い』、胸の奥でそう思うのは話題の通り魔である。薄い緑色の長髪を風になびかせながら彼女はため息を一つ、その視線の先には意識を失ったガタイの良い男が意識を失っていた。

「もつと強い相手を」

「そんなに戦いたいんだつたら適当な大会にでも出たらどうだ？」

探索魔法や目撃情報等を元によく見付け出したキヨウマは彼女のつぶやきに返答する。突然の後ろからの返答に、彼女はとくに驚いた様子もなく淡々と言葉を返す。

「私が求めているのは強さ、”遊び”では得られません」

「だがアンタが狩ってるような雑魚よりはずっと上質なのが揃ってると思うが？」

「いえ、貴方という素晴らしいものが釣れました」

そう言って彼女はキヨウマの方へと振り返る。その目元にはバイ

ザーが下ろされてはいるが、見えないはずの視線が自分を鋭く睨みつけているのがキヨウマには感じ取れた。

「相当の”遣い手とお見受けします。故に一つ勝負を”

勘違いだ、それに女性を殴るのは趣味じゃない」

「ムッ」

キヨウマの一言で彼女は内心激怒する。なぜなら女性であるからとるに足らないと、戦うまでもないとそう彼女の心は感じたから。だからそれを訂正させるために二人の間にあつた距離を一息で詰める。攻撃はしない、ただし先程の言葉を訂正させるために圧倒的速度を持つて寸止めする。それが彼女の狙いだった。

「ただし、縛る趣味はある」

それはキヨウマが彼女に声をかける以前より潜ませていた設置型のバインド。一直線でキヨウマへと駆けてきた彼女は油断もあり、あっさりとバインドに絡み取られる。

「やはり”相当”な遣い手ですね、趣味の方は……………変態的ですが」

「……………冗談だ、にしてもいきなり襲いかかってくるとはどういう見だ？」

「安心を、寸止めする予定でしたから」

そういつて彼女はキヨウマが施したバインドを力任せに引き千切

る。キヨウマが設置したのはランクB程度のミッドチルダ式魔法であつたのだが、それを力任せに引き千切る彼女に無茶苦茶な奴と突っ込みながら口を開く。

「……一つだけ訂正しておく、何を持って感じたのか知らないが俺は”何の遣い手でもない”」

キヨウマの言葉に偽りは無い。魔導師レベルはB+で凡庸の一言、それを補うための正確無比な弾丸を放つことが可能……な訳はなく、かと言って他の何かに特化しているという訳でもないどこにでもいる魔導師である。だというのに彼女は首を横に振って否定する。

「呼吸が師のそれに似ていました。師曰く呼吸とは全ての行動において最も重要であり軽視され、正そうにも天性のモノと並外れた努力が必要……だから私は貴方との決闘を望みます」

否定しようとした、だがバイザーに隠されてをも感じ取れる真摯な視線にやれやれと首を横に振る。

「本当は君の事を調べるだけだつたのに……いいだろう、ならばお相手しよう」

そう言ってキヨウマが懐から取り出したのはボロボロの鞘に収められた短刀。そこからスラリと抜き放たれた刃は鞘と同じくらいにボロボロで所々の刃が欠けていた。だがその漆黒の刀身だけは異彩を放ち、異様な存在感を持っている。そんな刃をキヨウマは逆手に構え、腰を落とす。

その様子を見て彼女は口元をニヤリと歪ませると、無手を構える。デバイスもなくただ己の純然たる技術を形としたそれは数多の敵を

打ち倒してきた力。距離はおよそ5メートル強、魔力による加速を用いればほんの一瞬で詰められる距離。

「カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルド」

「我流、キヨウマ・ミツルギ」

「「参る!」」

瞬間、二人は地を駆ける。先手を取ったのは彼女、魔力を纏わせた拳をキヨウマへと突き出す。それをすれすれの所で回避して後手。逆手に持った短刀を手にして彼女の脇をすり抜けながらに斬りつけるがそれは空いていた拳でなんなく弾かれる。

「はアアツ!」

そして弾きながら彼女は回し蹴りをキヨウマへと放つ。回避不能、ガード不可の絶妙なタイミングで放たれたかに思われたその攻撃はその体を前へと前転させることでかすめながら回避。そして彼女よりも早く体勢を立てなおしたキヨウマは逆手の刃を瞬時に持ち替えてその切っ先を真っ直ぐ彼女に向けて走りだす。

「貰ったッ」

「甘いッ!」

対する彼女は体勢を立てなおしていないにもかかわらず、最初に防御した拳を構えカウンターを狙う。そして一瞬後には何かが折れた嫌な音とバチツという異音が響いてキヨウマが空中へと吹き飛ばされる。

「ッ」

「くっ」

吹き飛ばされ自由落下しながらも地面に降り立つキョウマ、対する彼女はその場に膝をつき苦悶の表情。

「今のは避ける所、だろうが」

「相手が油断するその一瞬を突く、それが霸王が進むべき道です。しかし、あそこから反撃されるとは思いませんでした」

キョウマの短刀は7センチほど逆手から持ち替えたとしてもせいぜいが拳2つ分ほどのリーチしかなく、それを前へと突き出していた。対する彼女は無理な体勢でなおしつかりと拳を引き絞っており、突き出された刃が身体に届く前に攻撃して無効化するなどは彼女の技量を持ってすれば容易く、実質彼女の拳はキョウマへと届きその結果が空中浮遊と自由落下。

「まさか、刃が伸びるとは」

「スタンソード、魔力刃にスタン効果に乗せた魔法さ。尤も俺程度では数秒間展開するだけで限界なんだがな」

二人の言ったとおり、彼女の拳がキョウマへと届く前に回避も防御も今度こそ不可能だと悟った最後の悪あがき。それが拳が届いた瞬間に彼女の首筋に接触して一瞬であるが数百万もの電圧を与え、結果がなにかの異音であった。

「さて、この辺でお開きにしようか。主に”俺のダメージがでかい”し技量差も相まって君の圧勝だよ、霸王アインハルト」

「えっ？」

「それじゃあな」

それだけ言ってあっさりと背後を見せるとその場を後にしようとするキョウマ。

「あ、あのッ！」

「ああ、それと……決闘を申し込むのはいいけど防護服はしっかり着用させるように」

「……あれ？」

「じゃあな」

今度こそ本当にその場を後にしたキョウマ。対する彼女はいろいろと言われて混乱しながらも一つ一つ考える。その一、彼女はたしかに名乗ったが本名を名乗った覚えはない。だというのにキョウマは彼女に対して霸王”アインハルト”といった。其二、キョウマが言った”防護服はしっかり着用させるように”。

死に別れた師と同じ呼吸法で現れたキョウマの存在は声をかけられる前から気がついていたが突然のことで興奮していた。いつか師に勝ちたいと願い、されど勝つことが出来なかった”彼女”と似たような存在が目の前に現れたのだから当然だろう。だから望むがままに戦いを挑み、キョウマいわく彼女は勝つことができた。

「あつ……行かないと」

そこまで考えて、ようやく理解した。キョウマは防護服なしの正

真正銘の生身で戦っていたということに、確証に変わったのは彼女の一撃がキヨウマの腹にヒットした時になった何か折れたような音。それが骨を叩きおった音であると今更ながらに気がついて、しかし先ほどのキヨウマの一撃が身体にまだ残っており立っているのもやっど。それでも彼女は気力を振り絞って、キヨウマが立ち去った方へと歩き出したのだった。

01話 依頼人

『ミツルギ魔法具テスト社』。ミッドチルダの裏通りの片隅にあるその小じんまりした一室でキヨウマは脇腹に器用に包帯を巻いていた。術式の刻まれたその包帯は魔力を持たない一般人や低級魔導師用にある会社が開発した治療用魔具であった。尤も使い捨てで高価な上に高位の魔導師が治療魔法をかけたほうがはるかに効果があがるために今では忘れ去られた骨董品であるのだが。

そんな骨董品をキヨウマは器用に巻きつけた後、その包帯を隠すように黒一色の服を着る。それと同時にトントンと扉を叩く音。キヨウマは残った骨董品を戸棚に治すと扉を開ける。そこには薄汚れた建物とは似つかしくないスーツを着た女性とその後ろには黒服の男達。

「これはこれは、重役殿がお見えと伺っておりますがまさか娘さんだったとは」

「ええ、そろそろ派遣という形ではなく我が社に入っていただければと思ひまして」

「あらゆる角度から見つめることが必要となってくる仕事です。故にお断りさせて頂きますよ」

「あら残念」

「こんな所で立ち話も何です。ソファの方へどうぞ」

「ええ、失礼するわ」

そう言ってソファ―に座る女性の対面にキヨウマは座る。彼女の後ろには数名の黒服の男たちがただ無言で立ち、まるで威圧するかのようキヨウマを見るがキヨウマは特に気にしたふうもなく口を開く。

「さて、今回の仕事はどのようなもので？」

「ええ、これをD&M計画の概要書です」

「D&M計画？」

聞き覚えのない単語に、女性はカバンから紙の束を取り出すとキヨウマへと渡す。

「魔法が先天的なものに大きく左右されることはご存知のことと思います。故に我社では資質に左右されない平均的な兵器開発を目指しております」

「それは質量兵器で十分足りるのでは？」

「それは管理局にて規制されています。故に質量兵器、そして魔具に変わる新たなジャンルを創りだそうとした計画がD&M計画です」

「のわりに魔法に”過去の遺物”やらを参考にしている所が多々あるようだが？」

「先天性のモノに左右されることを除いては魔法、そして”過去の叡智”も十分に優秀ですからね。それらを参考にすることは当たり前では？」

「なるほど、そうしていざ作っては見たが使い勝手が非常に悪かったため俺に話が回ってきた。そんなところですか」

話をしながら資料を読み終わったキョウマが出した結論がそれ。

その資料には融合による身体能力の超飛躍化を実現させる魔具について書かれていた。だが融合する魔具というのはユニゾンデバイスとも呼ばれる高い処理能力を持ったモノであり、仮に融合したとしても”一部例外”を除いてそこまで強くなるわけでもない。それをストレージデバイス程度の処理能力で実現させるというのがその計画書の概要であった。

なぜストレージデバイス程度の能力か、それは”一部例外”である暴走状態を引き起こさせるため。ユニゾンデバイスの暴走とは高い処理能力を持ったデバイスに使用者が乗っ取られる状況であり、ならばそのユニゾンデバイス側がストレージ程度の処理能力の低い状態であれば暴走状態にてその権限を逆に奪い取り、その結果高い能力で戦うことができる。ただそのためには高い技量が必要となり、それが故に自分に話が回ってきたのだとキョウマは結論したのだ。

「ええ。あまりの使い勝手の悪さに内の被験者は全員病院送り、受けていてだけませんか？」

「ああ、構わない。だから後ろの物騒な奴らを下がらせてくれ、大方断った際の口封じ要因だろう？」

「まあ、彼らは私の護衛。それ以上でもそれ以下でもありませんよ。お父様の意図までは存じませんが」

恐らくそれであろうとキョウマは思う。過去に彼女の会社に対して莫大な損失を出した”らしく”、その事が影響して仮にキョウマ

が断つた際にそれを理由に痛い目にあってもらうという魂胆だつたのだろうと予測。尤も仮に断り、襲いかかってきても生き残るだけの自身は持っていた。

「まあいいさ、それじゃ契約は成立。俺はどうすればいいのかな？」

「来月、ある次元世界に派遣していただきます」

古代の遺物であるロストログイアクラスのユニゾンデバイスでは世界が滅びるほどの潜在能力を持っており、過去にも幾度かの世界が滅ぼされている。いくら今回の兵器がそのクラスほどの力を秘めておらずとも最悪の事態は想定しなければならぬ。故に派遣されるのはどこか生物の住んでいない未開の世界であるかと当たりを付ける。そして、すぐに出はなく来月ということはまだ場所の確保が完了していないため。ほとほと、危ない橋であるということに自覚しつつ辞める気などさらさらないキョウマであった。

「ふう」

誰もいなくなつた応接間のソファでキヨウマはため息をついた。キヨウマがしている仕事は魔法具のテストとはいつても入ってくる仕事といえればテスターを雇う金さえ乏しい小さな会社や今回のような高度な制御能力や危険を伴うものばかりであった。

こんなミッドの薄汚れた場所に住んでいるがキヨウマに金がないというわけではなく、下手な大会社よりも多くの金を有していたりしたのだが彼自身が必要であるもの以外は無欲であったがためにこんな場所に住んでいるというだけ。

理由があるとすれば『これが俺の役目だから』というのは本人の談、この仕事をしているのは自らの意思云々ではなくただの機会の歯車としての役目にすぎないと割り切っていた。

「流石に今回はマズイかもな……」

そんな彼であるが今回の依頼ばかりは思わず弱音を吐く。確かに兵器関連のテスターを過去に何度もやったことはあった。けれどそれらの多くが”命の危険が伴う程度”であった。だというのに今回は個人ではなく多数、しかも世界を掛札にした博打である。

「つと、弱音を吐いてもなにもかわらないな」

キヨウマは一瞬自嘲的に笑つと机の上にある端末の電源を入れる。そして幾つかのパスワードを入れて立ち上げるとメールの作成にとりかかる。宛名はリンディ「ハラオウン」、内容欄には霸王についてだ。

前日、リンディから受けた（受けさせられた）依頼である霸王についてキヨウマは調べていたのだが調べていく過程で霸王の血筋が

今もなお残っていることを知った。そしてその血筋の中でもある少女が目撃情報と”若干”一致した、”若干”というのは髪の色や流派は同じではあったが目撃情報と比べてあまりに”幼すぎた”ということ。

その事が気になり、一連の目撃情報や探査魔法を元によやく昨日に件の霸王と相見え気がつければ戦闘になっていたという訳であった。相手は無傷、対するコチラはアバラが数本粉碎。けれども昨日の一見で霸王の正体は割れた。

「アインハルト」ストラトス、まさか年下の女の子に手傷を追わせられるとはな」

その血筋の少女の名を呼んだ時、彼女は反応した。故にこの少女こそが恐らくあの霸王であるとキョウマは当たりをつけていた。そしてその事がショックだったり若干悔しいと思っているキョウマ。

「次があれば全力で戦ってみたいものだな」

昨日の戦闘では自前のバリアジャケットを整備に出しており、更に今日の商談も有ったがために一撃を喰らってからすぐに戦闘を終わらせた。その一撃が予想以上に重くその結果がアバラ数本の粉碎、この借りはいつか返したいがそんな機会はないだろうと思いつながらリンディに出すメールをかき上げる。

霸王アインハルト」ストラトス、霸王の末裔でありカイザーアーツと呼ばれるベルカ古武術の遣い手。実力は非常に高く並の魔導師や騎士では太刀打ち不可。バトルジャンキーではあるが喧嘩を買わない限りは一部例外を除いて襲いかかってくる事はないため危険度はF以下、しかし相応の実力者であればその限りではない。以上

「こんなものでいいだろう」

送信ボタンを押して一息つく。仕事が本格的に始まるまで一ヶ月、簡単な魔法具のテスターでもしながらそれまでの時を過ごすかと思うキョウマだった。

「まさか霸王の末裔だったとわね」

キョウマから送られてきたメールを見ながらリンディは一人呟いた。呟きながらも空いた3つのディスプレイから視線をそらすことはない。そのディスプレイには今現在、管理局本局に報告された報告書のリストが挙がっていた。

「それにしてもキョウマさんが振り返ちにあつたこととかは書かれてないのね」

ある情報筋からキョウマが負傷したという事を聞いていたリンディは報告されていないことに若干悲しげな声をあげつつ、二つの報

告書を開く。

「クロイツ社が第66管理世界で秘密裏に工場を作っている形跡あり、こっちはミツルギ魔法具テスト社にクロイツ社の一人娘がお忍びでなにかを依頼した模様。彼のことだから受けたんでしょね」

『クロイツ社』、二十年前にデバイス産業に参入した企業でありその業績は上昇の一途をたどっている。使い勝手が売りで、低ランク魔導師から高ランク魔導師までクロイツ社の商品にお世話になっている者は多い。更に”使い捨てのデバイス”というデバイス界に新たな波を生んだ商品の登場は当時の魔導師・騎士たちを驚かせた。カード型のデバイスに術式と魔力を予め組み込んでおき、必要な時に瞬時に発動させるこの道具はコストを度外視すれば一般人でさえも魔導師に打ち勝てるほどの潜在能力を秘めていた。参入と同時に販売されたこの商品はヴァージョンアップを重ね、激戦区などの魔導師や騎士たちの強い支持を今なお受けている。

だがクロイツ社の黒い噂は絶えない。曰く人体実験をしている、曰く危険性の高いロストロギアを所持している、曰く犯罪者との繋がりがある曰く……といった具合だ。特に6年前にあった管理外世界に非合法に建設されていた施設が何者かによって襲撃され多くの死亡者を出した事件は有名だ。尤もクロイツ社側は一部の上層部による暴走と公表しており、上層部の首切りに罰金のみでたいた罰則を課すことはできなかった。

対して『ミツルギ魔法具テスト社』はというと個人経営でありながらも経営していた前社長は元より現経営者のキヨウマも高い制御能力を有することから大企業からの依頼が多く、また契約金等も非常に安いことから小企業からの依頼も多々あるその道では非常に有名な会社だ。更にそれぞれの会社の機密はどのような情報でも決して漏らさないため、信頼度は非常に高い。そのため非合法な依頼もたまに舞い込んできていたりして、古い友人の息子であるキヨウマ

のことをリンディは心配していた。

「ご飯できたよ」

「分かったわ」

どうしようかと悩んでいると、廊下の方から義理の娘からそんな声をかけられリンディは思考を中断。起動されたディスプレイの電源を全てoffにすると夕食を食べるために部屋を後にするのだった。

01話 依頼人（後書き）

数日かけてもメモ帳10KBにも満たない自分の能力不足に全俺が泣いた。そんな訳で10KB以上になってから次より投稿する予定。ああ神よ、俺に小説家としての才能をくれ〜

02話 温泉に至る長き道

「セット完了。後は打ち上げるだけ……なんでもこんなことをしてるんだろっな」

日がすっかりと暮れた河原でキョウマは一人、遠くを見つめながら花火の準備をしていた。数日後にクロイツ社からの重要な仕事があるというのに、ミッドチルダから離れた異世界にてそんなことをしているのかという話は一日ほど巻き戻る。

「温泉、ですか」

「ええ、知り合いが温泉を掘り当てたらしくてよかったですらどう？」

ミツルギ魔法具テスト社へ魔法具へのデバイスのテストの仕事は昨日まででほとんど終わらせ、後は数日後の重要なクロイツ社からの仕事のみとなっていたキョウマは暇を持て余していた。そんな時にリンディから通信が入りそんな話を持ちかけられ、数瞬迷うキョウマ。

大仕事前にゆっくり温泉につかるのも悪くはないかという思いと、いままでリンディに話を持ちかけられて楽だったものなどほとんどなかったなという思いからである。なんせ、この前のインハルトの件に始まり雑用・探偵から管理局の手伝いまで様々な仕事を半ば押し付けられてきたキョウマである。何か裏があると思えて当然であった。

「失礼ね、今回は何も無いわよ」

「かつてに人の心を読まないでください」

「ああ、キヨウスケさんだったら即答だったのに。その息子のキヨウマさんはどうしてこんなに疑り深い人になってしまったのかしら」

キヨウスケというのはミツルギ魔法具テスト社の前社長にてキヨウマの父親であり、キヨウマをそのまま大きくしてクールさを兼ねあわせた人物だった。尤もそのクールな見た目に反して重度のお人好しではあったが。そして大小様々な怪我を負って帰ってきてくる父親を間近で見っていたのだ、人とは学ぶ生き物である。

「いままでの行いを思い出してくれれば簡単な話ですよ」

「おかしいわね、しょうが無い、私の娘も行くから、寝とつちゃっていいわよ」

「寝とつちゃっていいわよ、じゃねえ　　！！」

思わずキヨウマは叫ぶ。当然だろう、娘を寝とつちゃえと見ず知らずではないが言い放つ母親がいたのだから。だが本人はというとやけに深刻そうな顔で話し始める。

「だって、私に似て美人だというのにそういう話をまったく聞かないんですもの。でも興味が無いというわけでもなくてこの前相談されたからここはキヨウマさんを押してみようかと」

「そもそも歳が離れてます」

「あら、恋愛に歳の差なんて関係ないわよ。それに5歳差なんて差のうちに入らないわ」

「あと名前は知ってるが会ったことがありません」

「これから愛を育ていけばいいからなんら問題無いわ」

「問題しかねえ」

「もう知り合いには連絡してるから明日の朝一に無人世界カルナージまでお願いね」

「………実は仕事が」

「あら、4日後の”大仕事”以外は暇だと思っただけね」

「………」

リンディは情報通だ。その事をキョウマは理解している。だが4日後、あまりにグレーに近いであろう仕事の事を知っていたのに画面に映るリンディを睨む。

「そんなに怖い顔をしなくても、私を除いては一部の管理局員しか知りませんわよ」

「つまりは、管理局の監視の目があるわけですね」

「ええ」

肯定の言葉にキヨウマは悩む。管理局の目があるということには仮にテスト内容が黒で合った場合、居合わせたキヨウマも捕まることとなるのだから。だが、この事をクロイツ社が把握していないのかと問われれば答えは否であろうとも予想がつく。黒い話の絶えない会社ではあるがかの企業は管理局内とも通じている、情報が降りてこないはずがないのだ。自身をスケープゴートとするのかとも考えたが、クロイツ社の一人娘から直々に依頼されたのだから被害は大きいはず。ここまでの事を一秒ほどで考え、自身が捕まる可能性が限りなく低いであろうと結論づけるキヨウマ。

「気をつけなさい、今度の依頼は”危険”ですよ」

「ええ、まだ死ぬ気はないので」

こんな会話が昨日あり、心の淵に一抹の不安を抱えながらも朝一に無人世界カルナージまで行ったキヨウマ。途中、次元航行艦のエンジントラブルに見まわれたどり着いたのがカルナージの時計で午後七時半、随分と遅れてしまったなと内心で思いながらリンディの知り合いとやらを探していると紫色の髪をしたどこか小悪魔を連想させる少女がキヨウマの元へと歩いてきた。

「貴方がミツルギキヨウマさんですね」

「ああ、君は？」

「ルーテシアニアルピーノです。そして働かざるもの食うべからず、ですよね？」

「あ、ああ」

そうして少女に連れられ、気がついたら冒頭へと戻るというわけであった。

「まあ、今までのよりはずっと楽し有意義か」

設置された花火筒1000個、そこから30メートル離れて魔方阵を二つ起動させるキョウマ。それは低出力の攻撃魔法にも相当しないほどの弱々しい炎を出すミッドチルダ式魔法陣と物を動かす時に用いるこれまた低級ミッドチルダ式魔法陣。

ルーテシアから頼まれたのは時間になったら1000個ある打ち上げ花火を打ち上げて欲しいという内容。だがそれだけでは味気ないかと思ったキョウマは、過去にテストした花火の魔法具を再現することとした。その魔法具は花火を多段式ロケットのように打ち上げ順次爆発させていくというモノ、尤もコストがかさむ上に魔法なしでも似たような事ができるために実用性ゼロであったのだが。

「さて、始めるか」

そうしてキョウマは託された仕事を最上級の結果にて終わらせるために行動を開始したのであった。

「リンディさんに聞いてはいたけど、これは凄い……」

ルーテシアは夜空に浮かぶ色とりどりの花火に感嘆の声を漏らす。他にも彼女の友人やそのまた友人といった多くの人々が夜空を見上げているが皆の思いは一緒であろう。

ルーテシアが渡した花火は花火だが別段特別なものでない普通に売っている花火であった。尤も数は非常に多かったが、それだけであり家庭用の花火となんら大差ない。だというのに今上げられている花火はお祭りで打ち上げられる花火と大差ないのである。それも下手な打ち上げ花火と違い、夜空を埋め尽くさんばかりの花火は綺麗な一言。そうして五分ほどで花火は終わり、皆が鑑賞に浸っていると一人の男の声が響く。

「今宵の花火はお楽しみいただけただけでしょうか？」

声のした方を向くと1000発もの花火を打ち上げ終わったキヨウマが不敵に笑ってそう告げる。

「ええ、とても綺麗だったわ。キヨウマさん」

「えっ？」

「あの人が？」

ルーテシアの言葉になぜか今までの和やかな雰囲気だったモノが凍る。その事を不思議に思いながらもキヨウマは言葉を続けることとする。

「それは幸い、ところでどうかしましたか？」

特に身に覚えのないキヨウマは凍ってしまった雰囲気の原因を探るべく聞いて見ることにする。そうすると栗色の髪をした女性から

返答は帰ってくる。

「貴方が、貴方がフェイトちゃんの……」

確かリンディの娘さんの名前がフェイトという名前であったなと思いつきながら、栗色の髪の女性の横に立っている金髪の女性がなぜか顔を赤くしているところで思いつく。そういえば娘の”金髪”が凄く綺麗だと自慢されたことを、金髪は二人いるが一人は少女であるから消去法にてあのなぜか顔を赤くしている女性がリンディの娘だとさとする。そこでなぜ顔を赤くしているのかと考えた所であることに気がつく。

あの寝とる話云々であるがキョウマだけに伝えられたのかという所に、そして今までの経験上彼女が関わってくるような結果にならないという所に。だがそこまで気がついていても結果は変わらず、そしてその結果は予想外のものとなる。

「決闘、決闘なの!!」

栗色の髪の女性、高町なのはの凜とした声が辺りに響き渡った。そして五分も立たないうちに、なぜか廃墟にいた。

「温泉入りに来たついでに花火を頼まれて打ち上げただけだったのに、なぜこうなる」

なぜか大半が女性陣であり、その女性陣のほとんどからはなぜか軽蔑するような視線を向けられそして紫色の髪をした二人は面白そうだった視線を向けられ、唯一の男である青年からも軽蔑するような視線を向けられ訳が分からなかったが分かっていることが一つ。

「あの魔女、なにをした」

「デバイスを起動するくらいはまってやる、なの」

バリアジャケットで完全武装し臨戦態勢なのはが告げる。彼女から伝わってくるのは歴戦の戦士の殺気と高密度の魔力、彼女が非常に高位な魔導師であると気がつく。それこそエース級の一人握りしかない魔導師たちの一角、”今の”自分ではどうしようもない程の強敵であると。

「ふっ………フフッ」

気がついて、キョウマは笑う。なぜなら彼女ほどの強敵と戦えることに心が、魂が震えていたから。キョウマもことんバトルジャンキーなのである。それも相手が強ければ強いほど燃えるという非常に質の悪い、だ。

「なにが、おかしいなの」

「失礼、貴方ほどの強敵と戦えることに思わず笑ってしまった……
……許して欲しい」

「………」

「シルバーセットアップ」

「set」

キョウマがポケットから取り出したのは銀色の十字架、それを掲げてキョウマは告げる。すると機械音が当たりに響き、キョウマの

身体は名前とは反する黒色のバリアジャケットに包まれる。

「俺の全力がどこまで通用するのは知らない、だが立ち塞がるなら……倒すのみ」

「私は貴方を全力で止める、全力全開で」

地にキヨウマ、空になのは。キヨウマの手にはなぜか鞘に入れられたままの短刀を持ち、対するなのはは愛機レイジングハートを構える。

「高町なのは、行きます!!」

「キヨウマ!! ミツルギ、戦闘を開始する!!」

先手なのは、予め展開された魔力弾デイバインシューター16発によるオールレンジ攻撃がキヨウマの元へと一直線で駆け抜ける。だが既にそこにキヨウマの姿はなく上空からいつの間にかその手にあるライフル型ストレージデバイスから魔力レーザーが射出。その攻撃をシールドでガードしながら避けられた16発の弾丸を操作してなのははキヨウマを強襲。

それを察知したキヨウマは瞬時に攻撃を中断、ライフル型ストレージデバイスを待機状態にすると今度は先程まで持っていた短刀とは別の短刀形デバイスを起動させ8発の弾丸を斬り払い、後退。

「デイバイン・バスター!」

そこにキヨウマのライフルとは桁違いの桃色の砲撃が飛び、ガードすることがマズイと瞬時に悟ったキヨウマは無理やり身体を捻って躲す。だがそこを残った8発の弾丸が強襲。

「チツ」

それを舌打ちしながらシールドを張って防御する。

「貴方みたいな人がなんで」

そこから更に追い打ちが来ることを予想していたキョウマは話し始めるのはに警戒しながら耳を傾ける。

「なんで”女を食い物にする”の!?!」

「.....はあ?」

「なんで、なんでリンディさんはこんな人とフェイトちゃんをお見合いさせるの!?!」

「.....」

その言葉でようやく、キョウマは事の顛末を悟る。事の原因はリンディ、恐らくはキョウマに関して色々和无いことを吹き込みしかも本人の意志云々を完全に無視してお見合いさせるといふ所まで話がいっている。つまりこの決闘は完全なる誤解、だから弁解しようとするがその前に気がつく。仮にこの誤解が解けた時、この決闘は無効と成ることに。折角の強者と戦えなくなることに、誤解と解くことはいつでも可能。だが全力の高位魔導師と戦えるのは今しかできない。本人に自覚は一切ないがとことんバトルジャンキーであった。

「弁解は?」

「……………この戦いで弁解しよう」

「良い度胸なの」

そうして二人は決闘を再開した。

「凄い……………」

ディスプレイに映し出される映像にアインハルトは驚愕する。半ば強引に誘われ、合宿ということでこの場所まで来て強い魔導師と戦い新たな技を覚えて十分に満足していた彼女は最終日の今日、打ち上げられた空一面の花火を打ち上げたという人物を見て名前を聞き驚きと共に失望していた。

彼女の友人の母親の友人とややこしい立ち位置にいるフェイト、彼女になぜか非常に女癖の悪い男がお見合いするという話しはここまで来る道すがらにはもとより食事する時などもよく耳にしていた。アインハルトとしてはそのような男なら一発入れてやろうとも思っていたのだが、その相手がまさかこの前戦った師匠と似たような存在であるとは露とも思わずそれ故の失望。

だが、彼は今アインハルトと戦った時とは比べものにならない力

を持つて戦っていることに驚愕と、そして悔しさを噛み締める。自分では彼を本気にさせるまでもなかったのかと、だから彼の内面云々は完全に忘れその戦いを見続ける。気がつけば先程まで非難の目を向けていた者たちもその映像に釘付けとなっていた。

「中々やる、なの」

なのは今まで戦ったことのないタイプの相手に内心ワクワクと始めていた。距離・戦況に合わせてデバイスを使い分けるなののような砲撃特化型魔導師とは異なるオールラウンダーな魔導師。一つ一つの攻撃はまだまだ未熟であるが適材適所で攻撃してくるキヨウマは非常にやりづらいの一言。しかもまだ抜いていない短刀が奥の手を隠し持っていることを物語っている。

「はぁアツ!!」

対するキヨウマも思っていた、やりづらいと。先程から何度も攻撃するがその全てが彼女のシールドの防御されている上に相手のホームグラウンドである中遠距離からの攻撃しか行えないのだ。砲撃特化型の魔導師というのは砲撃の際に隙ができるのが常である。だがその隙を彼女の制御する魔力弾がことごとく潰しかかってくるのだ。まだ本命は”切れない”、彼の直感が彼女がいくつもの奥の手を隠し持っていることを告げているから。だから魔力弾を砲

撃を抜け苦手であろう近接戦闘をしかける。

その手には”まだ抜けない”短刀と既に抜き放った短刀型デバイス、その内の短刀型デバイスにインハルト戦でも用いたスタン効果が付加された魔力刃によって刀身ののびたスタンソードをシールドの叩きつける。桃色と黒色の魔力の残滓が当たりに飛び、そしてその硬いシールドを割る。

「喰らえッ！」

「甘いよッ！」

そして振った刃はしかし、彼女には届かない。なぜなら割った瞬間、キョウマはバインドに捕まってしまったのだから。更にそこになのはの姿はなく遙か上空にて魔方陣を起動させていた。

「ヤバイッ！」

「ストライク・スターズ！！！」

なのはの近接魔導師に対する十八番、魔力弾と魔力砲撃の一斉射。このままでは避けられない、ならば避けられるだけの力を持って避ければ良い。故にキョウマはギアを上げる。

「ブラスター1スタート！！！」

ブラスターシステム、それは肉体の限界を超えて力を生み出す諸刃の剣。それをキョウマは抜く。そして生み出された力にてバインドを力任せに引きちぎり、その場を離脱。更にお返しにとライフル型デバイスを瞬時に起動させ発射、今なお砲撃中のなのはへと向かう。

「くっ、ブラスター1リリース！！！」

その攻撃を砲撃を無理やりリセット& a m p・ブラスターシステムを解放することで回避するなのは。

「まさかブラスターシステムを搭載しているなんて」

「それはこちらの台詞だ、こんなもの使う奴の気が知れないと思っ
ていたが貴方だったとはな」

なのはのレイジングハートやキョウマのシルバーが搭載している
ブラスターシステムはその性質上、身体に非常に負担がかかる。そ
れ故によっぽど危ないことをするものや物好きくらいしか搭載する
ことはない。尤も二人とも理由は前者の方である。死闘でなく決闘
で用いるのはどうかと思うが。

「ブラスターシステムは身体に大きな負担がかかる………こ
の辺で勝負をつけるのはどうだ？」

「望む所、なの」

「なっ」

キョウマはまたもバインドに捕まる。それも先ほどとは強度が桁
違いのモノに、そのバインドはなのはが戦闘開始から設置してきて
いた術者任意起動型のバインド。

「これが私の全力全開」

なんとか引き千切ろうとキョウマは力任せに引きちぎっていくが
中々外れる様子のないバインド。そしてそれを迎え撃つように夜空

いっぱい桃色の魔方陣と魔力が集まっていく。

「モード マルチレイド」

「やらせんッ」

上半身のバインドは外し終わったが、下半身のほうは今なおバインドに拘束されているキョウウマは今まで抜こうとしなかった短刀に手をつける。

「スターライト・ブレイカ !!!」

「斬ッ!!!!」

先に放たれたのは桃色の砲撃、それもストライク・スターズとは比べものにならない個人に向けられるようなものでない砲撃がキョウマへと放たれる。それから数瞬遅れてキョウウマの短刀が引きぬかれ、黒色の刃が桃色の砲撃を切り裂かんと飛翔する。だが線と面では面攻撃が勝つのは通り、次第に放たれた黒色の斬撃は桃色の砲撃に押し返される。だからキョウウマはライフル型デバイスを起動させる。

「ブラスターオーバードライブ、スタートッ！ 貫けッ！！」

だが先ほどの攻撃からなのはに届かないことは確認済み、ならば出力を上げれば問題などない。故のブラスターシステムオーバードライブ、それはギアを最大まで跳ね上げる切り札。するとキョウウマの瞳と髪が銀色へと変色し、放たれたのは銀色の弾線、それは黒色の線を押し出して桃色の砲撃を”切り裂いて”進み、桃色の砲撃はその密度が高すぎるために切り裂かれてもなお突き進む。

「あつ」
「えっ」

二人の攻撃は等しく届く。それも同じタイミングで、必勝を確信していた二人は攻撃後の大きすぎる隙もあり避けることも叶わず直撃。二人は互いに地上へと落下すして行くのだった。

「ここは……………」

キョウマは見慣れない部屋で目を覚ました。辺りには誰もおらず、ただどこからか誰かの寝息が響く。なぜこんな場所にいるのかと思考を巡らせ、一分くらい思考した後温泉に来てなぜか決闘を申し込まれたのを思い出す。

「負けたか」

切り札を二つも切つての敗北、実は二人の最後の攻撃は双方へと命中したため引き分けであるのだがその事を彼は知らない。

「……………大きな仕事の前だ、考えるのはよそう」

ブラスターシステムを使用した後遺症で、痛む身体に耐えながらキョウマは立ち上がる。その目指す先は当然ながら温泉、そもそもキョウマは温泉に入るためにここまで来たのだから当然である。

そうして広い敷地内を迷いながらようやく目的の場所にたどり着いたキヨウマは疲れを癒すべく、邪魔な服を脱ぎ払って浴場へと侵入する。

「あら、今日はお疲れ様」

「ッ！失礼気が付かなかった」

突然女性の声が聞こえたため急いで回れ右をする。そこにいたのはルーテシアと同じ髪の色をした女性、そして彼女の母親であるメガ・ヌール・アル・ピーノ。

「やっぱり女癖の悪いっていうのはリンディさんの冗談だったのね」

「……………」

「まあ、そんなに怒らないで」

そうメガ・ヌールはいうがキヨウマとしては大仕事前にとんだトラブルである、尤も管理局でもほとんどいない高位魔導師と戦えた事は感謝さえもしているが。

「つと、こつちを見ても大丈夫よ。どうせ私達以外はだれもいないし」

「いえ、このまま」

「出るなんて言ったら抱きついちゃうぞ」

「……………了解」

渋谷キヨウマはメガーヌの方を向く。そこにはバスタオルで身体を包み、なぜか真剣な顔をしたメガーヌの姿。その容姿よりもなぜ彼女が殺気もこもった視線をぶつけて来るのかが気になり、キヨウマも顔を引き締める。

「一つ答えて、貴方は銀 イン？」

「……………銀はとうの昔に死んだ。今の俺はミツルギ魔法具テスト社、二代目社長キヨウマ＝ミツルギ。それ以上でもそれ以下でもない」

「そう、ありがとう。答えてくれて」

キヨウマの返答にメガーヌから殺気は消える。

「そうそう、フェイトさんとお見合いの話は本当みたいだから」

「はっ?」

「それでは、ごゆっくりおくつろぎ下さいませ」

爆弾だけ投下していき、メガーヌは何事もなかったかのようにキヨウマの横を素通り。

「そうそう、あの花火はすごく綺麗だったわ。また、お願いね」

それだけ言うとキヨウマを完全に置き去りにしてメガーヌは今度こそ浴場を後にした。

「……………ああ、温泉にゆっくりとつかろう」

すごく疲れた顔をしながら、その疲れを癒すために湯船へと歩いて行くキヨウマだった。

後書き

今回の話はどうだっただろうか。キヨウマがVividの温泉イベントに参加することと誰かとの戦闘は前々から考えていたのだが、最初の構想では戦闘相手はアインハルトだった。理由としては再戦だが友人と花火大会へと言った際に合宿最終日に花火師として登場させても面白いな、ついでにフェイトのお見合いの話を入れてなのはさんと戦闘させてみると面白そうなんて思ってしまったって駆け足ながらこの話が出来上がったわけです。

ちなみになのはさんがキヨウマと相打てたのは連日の訓練に加えてブラスタ―1までしか開放していなかったのが主な原因、ブラスタ―3状態だったらキヨウマ瞬殺でしたよ。さて、伏線もいくつか引いたし今回はメモ帳10KBを超えたいし割り満足したので次回作もとつとにかき上げるとします。以上、作者の後書きでした。

03話 お見合い

「ごめんなさい！」

ぼおつとしながら夜が明けるまで温泉を堪能したキヨウマは”ある場所”へと向かっている途中温泉を出るとなのはと鉢合わせ、そして謝られていた。

「ああ、誤解を”解かなかった”俺も悪いし、こちらこそ悪い。それより身体は大丈夫か？」

「うん、えっとキヨウマくんの方こそ大丈夫？ プラスターシステムをオーバードライブさせたって聞いたけど」

「瞬間的だから問題はないさ」

実は今なお身体中の痛みが治まらないのだが、その痛みを振り払うようにキヨウマは言う。ただの男のやせ我慢である。

「そう」

だが同じプラスターシステムを使っているのはは気がついていてた。たとえ一瞬でもプラスターシステムを最大まで使用すると身体には過度の負荷がかかることに。けれどもキヨウマの本当に何でもなさそうな瞳が、それ以上の言葉を飲み込ませる。だからなのは話題を変えることとする。

「あの、フェイトちゃんのことだけど……」

「……ああ、リンディさんにも困ったものだ。お見合い、なんて承諾した覚えはないのだが」

「で、でもでもすっごくいい子だよ。綺麗だし」

今までキヨウマに関するありもしない悪評ばかり聞かされて、合宿前に来たというこの話には非常に反対であったが今はと言うと逆に賛成していた。拳は口程に物を言うというわけである。

「はあ………」

だがキヨウマはと言うと温泉後の独特の身体のダルさ（数時間浸かっていたため）に加えて、熱く話したすなにはそんな返事を返すしかない。そしてそんな彼を見つけた人物がもう一人。

「見つけました」

碧髪の少女がなのはの後ろから現れる。どこかで見たことはあるのだがどこかが思い出せないキヨウマ。だからキヨウマは口を開く。

「誰だ？」

「むう、あの時の事を忘れたんですか？」

「………キヨウマくん、アインハルトちゃんになにをしたの？」

目の座っているなのは、自分のことを覚えていなくて怒った顔で見つめるアインハルト。対するキヨウマには彼女、アインハルトに

関する記憶はない。それもそのはずでキョウマが戦ったアインハルトは変身魔法で大人の姿であり、普段の少女時の姿は様々なツテを総動員して手に入れた資料で多少見た程度。

「あの時の霸王か？」

「そうです」

だがなのはアインハルトの名前を言った事で彼女の”オトナモード”時に戦闘したことを思い出す。そうして彼女の事を思い出すことでようやく彼女の事を芋づる式に思い出す。

「こつちが本来の姿か」

「はい」

「無視しないで欲しいんだけど」

「ん、ああ」

「それで、なにをしたのかな？かな？」

「俺が路上で襲われた」

どこか怒った様子で聞いてきたなのはキョウマのその返事に表情がこおり、アインハルトは慌てる。

「わ、私は襲ってません。ただ、その………相手があまりに弱すぎて、憤ってる時に師と似た雰囲気を感じたので攻撃を」

「アインハルトちゃん……………」

「それを襲つと言つ」

「うう……………すいません」

非難の目を向けられてシユンとなるアインハルト。 そんなアインハルトの頭にキヨウマは手を置いて、それにアインハルトはビクツとするがキヨウマは特に気にした様子もなく撫でる。

「俺も君の情報収集が目的だったから、まあお相子ということだ」

「こ、子供扱いしないでください。 って情報収集？」

「もしかしてリンデイさんが言っていた探偵の人って」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしつつ上擦った声で聞くアインハルトは置いておくとして、なのはがいったキヨウマを探偵扱いしている事に彼は内心深いため息をつく。

「リンデイさんに無理やり頼まれたので探偵でも何でもなし。 さあ、話は終わりだ。 二人とも何か用事があったからこんな朝早くにこんなところを彷徨っていたのだろうか？」

そう、まだ夜は明けたばかり。 まだ大抵の人が寝ている時間帯なのである。 だからダルさから回復したキヨウマはそう予想をつけるが、その予想は通りだったらしい。

「そうだった、朝練に行かないと……………キヨウマくんもどう？」

「俺は大きな仕事が控えてるから遠慮しとく」

キョウマの言葉に残念そうな顔をする二人。だから罪悪感に駆られて、しょうがなしにこういう事にする。

「今度、暇があればその時に頼む」

「うん」

「楽しみにしてます」

それだけ言っただけでキョウマの元から去っていく二人。二人を見送った後、キョウマは二人の行ったのと反対方向に歩き出す。そうしてしばし歩いて、よさそうなテラスを見つけたキョウマはそこにあつた椅子に腰を下ろすとポケットからPeaceと書かれた箱に金属の箱を取り出す。そしてPeaceと書かれた箱から一本の円筒状の紙、つまりはタバコを取り出すと口に加えて金属の箱……ジッポにて火をつける。

「ふう」

至高の一時に身体を弛緩させつつ、キョウマは先程のことについて考えていた。

「霸王……あの時と違って大分丸くなったか。苦勞はしたが役に立ったか？」

あの時とは問答無用で襲ってきたあの時のことであり、苦勞とはもちろんインハルトを調べるために費やした様々な努力のことである。自分の努力が無意味だったのかも知れないが、結果的には今の状況になり孤高そうに見えた彼女の周りにはなのはとの決闘前に

みた彼・彼女達がいる。その事にキヨウマはの達成感のような物を
感じつつ、吸い終わった一本目をポケットから取り出した灰皿に入
れて二本目に火をつけようとする。

「タバコは身体に良くないよ」

だがその言葉でジッポをもった手が止まる。声のした方を見ると
あの時の金髪の女性、フェイトがいた。

「親父の影響で知識ではそう知りつつ、吸ってしまっただ。そっ
えば朝練はいいのか？」

「えっと……」

「……ああ、いいさ」

先程までフェイトのことを熱く語りだしたなのを思い出
して、大方彼女がフェイトを送り出したのだとキヨウマは予測。だ
からそれ以上の言葉は無用であったから彼はそう言う。

「えっと……ごめんなさい」

だから次の瞬間にフェイトの口から出た言葉にキヨウマは困惑す
る。とくになにかをされたような記憶は（なのはとの戦闘は望んで
やったため）ない。だから不思議そうな顔をしているキヨウマにフ
ェイトは言う。

「母さんにいろいろと言われて、勘違いしてて」

「ああ、いつものことだ。気にしてない、そういう君こそあの母親

の娘だったら相当な苦勞をしてそうだが」

「フェイト」

「ん？」

「名前を呼んで。最初の大切な友達から友達になるために教わった大切なこと」

フェイトのその言葉にそういえば自己紹介をまったくしていなかった事を思い出す。そしてフェイトの言葉に成るほどと思いつつ、立ち上がり右手を差し出して言う。

「キョウマニミツルギだ。よろしくフェイト」

「うん、フェイトニテストロッサニハラオウンです。よろしく、キョウマ」

そうして二人は向い合ってイスに座ると世間話（主にリンディに課された苦勞話）に華を咲かせるのだった。

「フェイトちゃん、掴みは完璧だね」

「悪そうな人でもなさそうですし」

朝練をほつぱり出して、高台から二人の様子を見ていた面々がいたのはその面々しか知る由はないのであった。

後書き

お見合いというよりはただのお茶会にて終わった今回。一週間程時間をかけてこの量では読者の方々も不服ではないだろうか。なにせ作者自身が不服なのだから。でもさ、ここ最近友人が家に入り浸って書けないんだもん。しょうが無いじゃないか。誰かそのような友人をどうにかする方法を御存知だったら連絡をお願いします。(割と切実

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5690x/>

魔法戦記リリカルなのはVF-Conect

2011年11月16日02時06分発行